

主 題：愛ゆえの犠牲

聖書箇所：コリント人への手紙第一 8章1-13節

これまで私たちはIコリントの7章などを通して、「クリスチャンの選択」に関して学んできました。当然のことですが、私たちクリスチャンの選択は一般の方たちが下す選択とは違う場合があります。しかし、それが必要なのです。なければならないのです。クリスチャンが世の人たちが同じことを考え、同じ選択、同じ行動をしているなら、どのようにして「私は神によって変えられた」と言えるのでしょうか？神を証して行けるのでしょうか？私たちクリスチャンはもうすでに新しいものとされたのです。確かに、聖書の教えは周りの常識とは違うところがありますが、だからこそ、私たちは自分のうちにある信仰を、希望を、愛を、そして、私たちのうちにおられる神を明らかにすることができるのです。今回からしばらく、私たちが学んで行く内容は「偶像に捧げられた肉」に関する問題です。少し前に見た「結婚に関する問題」も、これから学んで行く「偶像に捧げられた肉に関する問題」も、「神の栄光のためにそれをしなさい」ということです（Iコリント10：31）。というのは、何度も学んでいるように、私たちクリスチャンはそのために神によって造られ、そのために今日も生かされているからです。そして、私たちがその目的に沿って生きて行くとき神が私たちを用いてくださり、私たちに祝福してくださるのです。私たちがより喜びに満たされた人生を送るために必要なことは、神がもっと私たちに関心を持ってくださることでなければ、私たちの周りの環境が変わることでもなく、私たちが毎日毎日をしっかりとして緊張感をもって、神を愛するがゆえに自分の生かされている目的を全うして行くことです。

では具体的に、どのようにすれば日々の数多い選択の中でしっかりと目的を達成できるのでしょうか？たくさんある選択の中で、よりすばらしい価値ある選択、神が喜んでくださる選択とはどのようなものなのでしょうか？もし皆さんが「本当に神に喜ばれたい！神に従って行きたい！」と考えておられるなら、このことに関心があるはずですよ。ゆえに、今日はもう少し具体的に、様々な選択の基準やいろいろな判断の基準というものが、聖書ではどのように教えられているのかということ、と一緒に学んで行きましょう。

☆クリスチャンができるよりすばらしい選択とは？

1. 自分の栄光よりも、へりくだりを優先する 1-4節

「:1 次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。:2 人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならぬほどのことも知ってはいないのです。:3 しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです。:4 そういうわけで、偶像にささげた肉を食べることについてですが、私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。」

自分の栄光、つまり、見栄やプライドよりもへりくだりを優先するということです。

当時のコリントの状況 = 1節にあるように、コリント教会からパウロに書かれた手紙には「偶像にささげた肉について」の質問があったようです。というのも、この当時のコリントの町には実に多くの神々のための神殿があったからです。神殿では、ささげられた動物の肉から、まず、神にささげるべき部分が切り取られ、それが焼かれます。その後、偶像に仕える祭司の分が取り分けられ、最後に、残った部分が払い下げられて、市場に売りに出されるという、そのような順序になっていました。しかし、ある場合には、いけにえとしてささげられた動物の前髪を少し切り取って焼いただけで、残りはそのまま市場に売りに出してしまうというようなことも頻繁にあったようです。というのも、当時の祭司たちの数に比べていけにえとしてささげられる肉の方が、圧倒的に多かったからです。実は、この当時コリントの人たちが口にする食肉の大部分は、このような形で出回っていたそうです。

また、それだけでなく、当時のギリシャ人たちは悪霊などの存在を信じて非常に恐れを抱いていました。その悪霊たちがどのように人間の中に入って悪い影響を与えるのか、それは自分たちが食べる肉を通して入るのだと信じられていたのです。それを防ぐためにも、当時のコリント人たち、すなわちローマ社会の人たちは、動物を彼らが信じている神にささげる必要があったのです。そうすることによって、いけにえとしての肉が神に属するものとなって清められると、そのように考えていたのです。ですから、彼らにとって偶像にささげた肉を食べるかどうかは大きな問題だったのです。しかし、その中にあってコリント教会の人たちは正しい知識を持っていました。

コリント教会が持っていた知識 = 4節にその知識がどのようなものであったかが書かれています。「私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないこと」と、つまり、どんな神が祀られていようと、どのような神に肉をささげようと、その神々はどれも本当に存在す

るものではないから、全く意味がないということをよく知っているというのです。確かに当時、聖書が教える本当の神を知っていた人たちは、すべてを導いておられる神がいかに偉大で、その方以外に神はいないこと、その方以外のどのような存在もその神に並ぶものなど決していないことを、知識として理解していました。しかし、確かにその通りですが、その神からいただいた正しい知識であっても、その使い方を間違えたら、罪を犯してしまうことがあるのです。現に、コリント教会の人たちがそうでした。

1節に「**知識は人を高ぶらせ**」とあるように、彼らは神からいただいた知識であろうと、自分たちで得た知識であろうと、自分のプライドのために用いていたのです。人を言い負かすために用いたり、少しでも自分を優位に置こうとしたり、人を見下したりと。それが1章で語られているこのコリント教会にあった分裂・分派の大きな原因でもあったのです。

信仰ゆえのへりくだり＝実は、私たちもそのような罪を犯してしまう危険性があります。「自分ほどこのことについて知識をもっている者はいない」と考えて、人を見下して優越感をもってしまふ、そのようなことはないでしょうか？「**知識は人を高ぶらせる**」、知識はあなたを高ぶらせるというのは神のおことばです。すべてをご存じの神、あなたのことを誰よりも知っておられる神がそのように警告しておられるのです。2節に「**人がもし、何かを知っていると思ったら**」とありますが、この「**知っている**」という表現には完了形が使われています。「完全に知っている」とか「もう十分に知っている」という意味が込められているのです。でも、私たちには「完全に知る」ことなど不可能です。ですから、もし誰かが「自分は何かを知っている」と考えて、その思いがその人を傲慢にするなら、その人は大切なことを忘れてしまっているということに気付く必要があります。それは、自分は神の前ではいかに愚かで知恵の足りない者であるかということです。それが2節の「**人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならぬほどのことも知ってはいないのです。**」ということなのです。どれほど知っているといっても全知全能の完全な神の前では、自分は愚かな者であり何も知らないのだと、そのことを私たち人間はまず知らなければならぬのに、それを忘れてしまっているとパウロは言うのです。

続く3節に「**しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです。**」とあるように、そのような傲慢さと、神への愛とは全く相反するものだと言います。もし、人が神を知り、神を愛しているなら、本当の謙遜を身に付けられるはずですが、「**その人は神に知られている**」というのは「救い」を意味しています。聖書の中でこのような表現は少ないのですが、ガラテヤ4：8－9に「**しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷でした。：9ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。**」とあるように、「**神に知られている**」というのは、その人が「私は神を知っている、信じている」という告白以上に、確固とした「救い」を意味しているのです。この反対の表現は、たとえば、マタイ7：23に「**しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』**」とある「**わたしはあなたがたを全然知らない**」です。救われていない人に対してイエスが言われたことばです。神に知られていないというのは「救われていない」ということです。ですから、本当に神を知り救われているなら、より謙遜になって行きます。人が神を信じその神を愛し続けて行くなら、その愛は確実にその人をより謙遜な者へと変えて行きます。なぜなら、その人は自分が神の前にいかに罪深く、無知であるかを知っているからです。それが、1節後半の「**愛は人の徳を建てます。**」ということなのです。神への愛はその人をより成熟したクリスチャンへと成長させて行くのです。

2. 自分の願いよりも神のみこころを優先する 5－6節

「：5なるほど、多くの神や、多くの主があるので、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、：6私たちに、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」、自分の願いよりも神のみこころ、神の栄光を優先するということです。

私たちが存在している理由＝私たちクリスチャンは神が唯一であるということを知っている者です。6節に書かれていることを知っています。ここで同じことが2度繰り返されることによって強調していること「**すべてのものはこの神から出ており**」、「**すべてのものはこの主によって存在し**」というのは、すべてのものはこの神によって造られ、それが今も維持されているということをパウロは訴えているのです。だから、私たちすべて神に造られたものは、この神のために生きるべきであると教えているのです。確かに、Iコリント6：12でパウロ自身が「**すべてのことが私には許されたことです。**」と言っているように、聖書で明確に禁じられていることは別にして、それ以外のことを私たちがするかしないかということに関しては、個人の選択に委ねられています。しかし、続いて「**すべてが益になるわけではありません。**」とあるように、私たちはどちらがよりすばらしい選択であるのかを自分自身で考えることが要求されてい

るのです。その大きな指針というべきものがこの8：6で言われている「**私たちもこの神のために存在している**」こと、つまり、神が喜んでくださるかどうかが、私たちが神によって造られた目的（「**わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。**」イザヤ43：7）である、神の栄光を現わしているかどうかなのです。私たちは今、自分がしようとしている行為が、また計画が、「果たして神の栄光を現わすだろうか？」と考え吟味する必要があります。

神のみこころを行なう＝もう一度6：12を見てください。「しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。」とあります。パウロはここで「支配」ということばを使っています。これに関連して、詩篇8：5-6をご覧ください。「あなたは、人を、神よりいっくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。：6 あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。」とあります。神は私たち人間を「神のかたち」に似せて造ってくださり、人間を被造物の王としてくださったのです。「創造の冠」ということばがありますが、そのように神は人間を被造物の頂点に置いてくださったのです。ですから、創世記1：26、28を見ると、「そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。…：28 神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」と、神はこのように人間に対して命じておられるのです。神が願っておられるのは、神がすべてのものを支配しておられるように、私たちが愛とあわれみをもってこの世界を治めることです。広い意味においてはこの地球を私たち人間はしっかり管理しコントロールして行く必要があります。ですから、私たちは環境汚染などの問題に無関心であってはならないのです。けれども、個人的な面で考えるとどうでしょう？お酒やタバコ、麻薬、ギャンブル、様々な欲望などに私たちは支配されてはいないのでしょうか？私たちは神以外のいかなるものにも支配されてはいけないのです。そのようなものを治めコントロールしなければいけないのです。あなたは神以外の何かに支配されておられませんか？テレビ、自己顕示欲、性欲、食欲など…。私たちクリスチャンは何にも支配されてはならないのです。なぜなら、神があなたをもうそのようなところから解放してくださったから、そして、今あなたは「神のみこころを行なう神の奴隷」だからです。私たちに要求されていることは、Iコリント10：31で教えられている通り「**こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。**」です。それなら、私たちは何かをするとき、それを一つ一つ吟味する必要があります。「これは神の栄光を現わすだろうか？それとも、私のうちにある罪、欲がそれをしたと言っているのでは？」と。もし、それが神のみこころでないとするなら、すぐに止めることです。自分で判断がつかないときはしばらくそれを止めてみることも有益です。それによって自分がそのことに支配されているかどうかははっきりし、さらに、もっと自由に広い視野をもって自分が何をすべきなのかが判断できるのではないのでしょうか。

3. 自由に固守するよりも、愛を優先する 7-13節

「：7 しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんで来たため偶像にささげた肉として食べ、それで彼らのそのように弱い良心が汚れるのです。：8 しかし、私たちを神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。：9 ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。：10 知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、それによって力を得て、その人の良心は弱いのに、偶像の神にささげた肉を食べるようなことにならないでしょうか。：11 その弱い人は、あなたの知識によって、滅びることになるのです。キリストはその兄弟のためにも死んでくださったのです。：12 あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を踏みじるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。：13 ですから、もし食物が私の兄弟をつまずかせるなら、私は今後いっさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまずきを与えないためです。」

兄弟愛を優先するのです。自由が与えられているからといって何でもして良いとは教えられてはいません。それよりももっとすばらしい選択は兄弟愛を実践することです。

良心が弱い人の問題＝ここまで見て来たように、肉を食べること自体は何ら悪いことではありません。また、それが偶像にささげられたものだからということで、そのことがその人から祝福を奪ったり、神の栄光を汚したりするようなこともないのですが、だからといって何をしても良いのかというと、パウロはさらに踏み込んで話をしようとしています。果たしてそれが、愛ゆえの行動なのか、兄弟を愛し、兄弟を思いやるゆえの選択なのか、そのことを一人ひとりがしっかり判断する必要があると言います。今この日本で、私たちの周りには当時のコリントと同じように、偶像に供えられた食べ物が供されることがあります。しかし、それをこのコリントの場合と同じように見ることはできません。というのは、初めに言ったように、この当時のコリント人たちは、偶像にささげられたものを食することで悪霊に乗り移られるかもしれないと真剣に考えて恐れていたからです。彼らはいまだに偶像になじんできた習慣

に捉われているのです。彼らの心の中には、まだ偶像の神々や悪霊というものが実体をもっており、彼ら自身に多少の影響力を及ぼしている存在だったのです。その神々に肉がささげられ、その肉は神々に属するものとなりました。それが市場に出回り、彼らはその肉を「神々に属するもの」と見ているのです。偶像の神々に属するものと考えているのです。ですから、それを食べることは、今自分が仕えている神に対して申し訳ないと、彼らの良心が痛むのです。彼らは良心を痛めながら肉を口にするのです。

果たしてそれは良いことでしょうか？実際に肉が偶像の神にささげられたことによって何か変わったでしょうか？何も変わっていません。パウロ自身が8節で「**私たちを神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。**」と言っている通りです。問題は肉そのものではないし、肉を食べることが神に逆らうことであるかどうかでもありません。では、何が問題かと言うと、その人がこれは神の前に正しくないのではないか、喜ばれないのではないか、罪を犯しているのではないかと、そのような疑問、迷いをもちながら、あえて神に逆らうことを行なっていることが問題なのです。神は私たちの行動をすべてご覧になっていますが、その行動以上に、私たちの心のうちをご覧になっています。ですから、その心の内側で、これは神に喜ばれないことでは？と思いながらそれを行なっている、そのことが問題なのです。このことは本人しか分からないことです。だから、パウロは「その人自身が判断しなさい」と教えるのです。7節で「**弱い良心が汚れる**」とパウロが言っているのは実にそのことなのです。ある人はその偶像にささげられた肉を食べることを全く問題としていない、それを食べることによって悪霊につかれるとか、偶像に仕えているなどは考えもしない、それはそれでいいとしても、そのことを弱い良心をもっている人が見て、それがその人のつまずきとなるのではないかと、そのことをパウロは教えているのです。コリント教会はそのような状況にあったのです。私たち日本の状況とは違います。たとえば、私たちが仏壇に供えられたものを食べるかどうかで、実際問題として、何の支障も恐れもありません。それを見て「あの人は聖書の神と仏教の神の両方を信じている」などと思う人はいないでしょう。しかし、当時のコリント人たちはそのようなことを恐れ、そのような習慣の中で暮らしていたのです。

私たちは人に与える影響を考える必要がある＝確かに、私たちには自由があります。しかし、その自由と同時に、私たちには自分の行動に責任があることをしっかり覚える必要があるのです。ある人は皆さんの行動を見て、この人がしているから良いのだと安易に考えて同じことをするかもしれません。その人はあなたのことを尊敬し、クリスチャンの先輩として、自分よりも成熟したクリスチャンであると見て模範にしているかもしれません。また、反対にその人は自分のしたいことをするために、そのための言い訳を捜しているかもしれません。11節に「**その弱い人は、あなたの知識によって、滅びることになるのです**」とあります。ここの「**滅びる**」ということばが具体的にどうなることを指しているかについては、いくつかの解釈があって難しいのですが、永遠の滅びのことか、それともこの世で墮落することを指しているのかと言われますが、それに続くことばが「**キリストはその兄弟のためにも死んでくださったのです。**」と、このようにその人が救われるためにイエスは死んでくださったという表現されていることから見ると、恐らくこの「**滅びる**」は永遠の滅びのことであろうと考えるのが必然となります。実際に、その行ないによって救いを失うことはないのですが、たとえば、教会に来て間もない人や、まさに救いに与ろうとしている人が、そのような行ないを見ることによって、その良心が汚され神を軽んじ、神の聖さをいい加減に理解してしまい、本当の救いに与れない、そのような危険性があるということを表わしているのです。その行動が影響を与え、ある時に、それがつまずきとなって、その人が救いに与ることを妨げることになると、パウロはこれを読んだ者が十分な緊張感を持ち、責任の重さを認識するようにと、与える影響が大きい場合があることを意識してこのように表現したと言えます。

ですから、私たちがこのことを知って考えなければいけないことは、自分が為すいろいろな選択や行動には大きな責任が伴うことをしっかり理解することです。私たちの行動が周りの人に悪い影響を与え、その人の救いを妨げることなど決してあってはならないのです。あなたにはそのような大きな影響が、また、責任が与えられているのです。そのことを知った上で、また、弱い兄弟姉妹をつまづかせるかも知れないと分かった上で行なうなら、その人は兄弟に対しても、神に対しても罪を犯すことになるというのです。今年度の私たちの年度目標は「弟子作り」です。しかし、弟子を作り、その弟子をより成熟したクリスチャンになるように導いて行くことは大変なことです。イエスを信じたクリスチャンにはこのような大きな責任、務めがある、そのことを私たちはしっかり覚える必要があるのです。

今日私たちは、よりすばらしい選択の基準に関する三つの原則を見てきましたが、これらの選択はイエスご自身が実践されたことです。まず、(1)自分の栄光よりもへりくだること。イエスは自ら弟子たちの足を洗ってへりくだりを実践され、私たちに模範を示されました。本当はイエスこそが栄光をお受けになり、弟子たちから足を洗われるべき存在であったのです。しかし、イエスはそのようにはされ

なかった、自ら仕える者になってくださったのです。(2) 自分の願いよりも神のみこころを行なうこと。イエスのゲッセマネの祈りは皆さんよくご存じでしょう。イエスは自分の願いではなく神のみこころを最優先されました。(3) 自由よりも愛の実践。イエスは神ですから、何ものにも強制されることのない全く自由なお方でした。しかし、その神が私たちに対する愛ゆえに、私たちには救いが必要であったから、自ら進んで十字架に磔(はりつけ)になってくださったのです。

ヨハネはIヨハネ3：16でこのように言っています。「**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。**」と。イエスは私たちのためにいのちを捨ててくださった、それによって私たちは神の愛が分かったのですが、今度は私たちが兄弟たちのためにいのちを捨てるべきだ、イエスが模範を示してくださったのだから、私たちはその模範にならって生きて行くべきであるとヨハネは訴えるのです。また、ヨハネはイエスが話されたこのようなことばも書き記しています。ヨハネ13：15「**わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。**」と、イエスが弟子たちの足を洗われたときにこのように言われたのですが、今自分がこのようにあなたがたの足を洗っているのは、ここで終わることではない、ここで仕えることをあなたがたが理解するだけでは不十分だ、今度はあなたがたがこのわたしの模範にならってこのように実践して行きなさいと言われているのです。最後に、Iペテロ2：21を見ましょう。「**あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。**」、イエスが歩まれたその歩みは完璧なものでした。けれども、それは私たちの模範でもあるのです。私たちがその足跡にならって歩んで行く必要があるのです。言い換えるなら、私たちはイエスが歩まれたように、イエスに倣って生きて行くことができるのです。

問題は、私たちがそのことを願い、そのことを目標とするかどうかです。このみことばが示す通りに私は生きて行こう、聖書が教える通りに、神の栄光のために生きて行こう、人につまずきを与えないように生きて行こう、神の模範に倣って私は歩んで行こうと、そのことを私たち自身が願うかどうかです。もし私たちがそのことを願い、このみことばに従って歩んで行こうとするなら、間違いなく、神は私たちを用いて変えて行ってくくださるのです。そうすることによって、私たちはもっともっと靈的にも、また実際の行ないにおいても、より成熟した、より目標を全うすることのできる、より他の人に良い影響を与えることのできる、そのような信仰者になって行けるのです。